

57【街の散策からの気づき発見】

御茶ノ水駅から東京都水道歴史館散策

会員 K.T.

東京都水道歴史館を見学しよう、と思い立ち、御茶ノ水駅にきた。むかし通勤に利用した駅であるが、聖橋口は様変わりしていた。お茶の水橋口の改札口は昔の面影があるも、構内は聖橋口と一直線につながり、都会的に洗練された雰囲気になっている。2009 年からの駅改修工事は今年中、2026 年に完成し、現在神田川に設けている工事用の栈橋は撤去されるらしい。

お茶の水橋から神田川を見ている。このあたりについては、司馬遼太郎 著『街道をゆく 36神田界限』に記載されている。「(前略)茗溪：家康が、秀吉から関東八ヶ国をもらったのは天正十八(1590)年の八朔(8月1日)である。いまの東京の歴史はそのときから始まるといっている。(中略)以上ながながと江戸草創のことにふれてきたのは、江戸が百万人の人口を養うべく自然に存在した土地ではなかったということをいうためである。江戸の地は、すべて人の手で造成された。造成のための諸人の労苦は凄惨なほどで、ひとびとは鍬でもって高所をくずし、低所には堀を掘り、土を掻きあげて湿地をうずめて地面らしくした。造成には、三代將軍家光以後までかかった。江戸・東京の土一升には、おびただしい人間の汗や脂がしみこんでいる。(中略)ともかくも家康入国以来、江戸でおこなわれつづけた土木工事は大変なものであった。一例をあげると、「神田御茶ノ水掘割」である。いま聖堂のある湯島台地(文京区)と神田山(神田台・駿河台)とはもとはつづいた台地だったが、ふかく濠を掘って、これを切り離し、その人工の溪に神田川の水を通したのである。現在の聖橋は、関東震災後、昭和3年にかけられた橋で、湯島台と駿河台をむすんでいる。(後略)」とある。東京の土地には、過去の人々のおびただしい汗と脂があったことをいいたく、引用した。

神田川は、三鷹市の井之頭公園の井之頭池を源にし、かつては平川と呼ばれ、現在の飯田橋付近から日本橋川を通して、日比谷入り江に流れ込んでいた。江戸幕府の河川改修で瀬替えが行われ、現在は両国橋で隅田川に合流する流路24.6kmの中規模河川である。お茶の水橋の中ほどから神田川を見ながら、『江戸時代初期に堀割られた河川なのだ』、と思い出していた。現神田川を挟んだ北側の本郷台(湯島台)と南側の駿河台は、一続きで、「神田山」と呼ばれていた。2代將軍徳川秀忠の時代(1605～1623)、水害防止用の神田川放水路と江戸城の外堀を兼ねて東西方向に掘割りが作られ、現在の神田川の流れになっている。神田山の開削土砂は日比谷入り江や汐留地等、江戸の埋め立てに使われた。お茶ノ水付近の神田川の橋は、お茶の水橋が明治24年(1891)に初めて架けられた。明治37年(1904)に「御茶ノ水駅」が開業した。お茶の水橋は、大正12年(1923)の関東大震災で焼失・破損したため、昭和6年(1931)復興事業で現在の橋に架け替えられた。下流にある聖橋は関東大震災の復興事業のひとつとして昭和2年(1927)に架けられた。橋の名前は一般懸賞募集され、北の湯島聖堂と南のニコライ聖堂の二つの聖堂を結ぶ橋として、「聖橋」と命名された。現在、聖橋側の神田川の川幅の半分ほどを御茶ノ水駅改修と川の護岸工事足場用に栈橋が設置されている。2009 年から始まった改修工事は17年の歳月をかけ、ほぼ完了、2026 年中に栈橋は解体撤去され、護岸改修・緑化等全工事が終了する予定との事だ。神田川とアーチ形の聖橋の景観がもどってくる。御茶ノ水駅から見る神田川・聖橋・お茶の水橋の景観は「21世紀の茗溪」となるかもしれない。お茶の水橋を渡り、順天堂医院側の外堀通りを神田川に沿って、水道橋方向へ歩くと、標識に「東京都水道歴史館」の表示を見つけ、順天堂医院と順天堂大学の間の坂を上っていくと、ほどなく、「東京都水道歴史館」について。



御茶ノ水駅/お茶の水橋口



お茶の水橋



お茶の水橋から神田川



東京都水道歴史館アクセス図



聖橋からのお茶の水橋



東京都水道歴史館